

またまた IC レコーダーを買った、朝に宅配便で来たので初物だけれど、「使ってみよう」と走るついでに河原に持ってきている。昨日は久しぶりに雨が降り続き、朝から夕方までの仕事、晩飯のあと、「まだ降っている、今日はやめよう」ということで河原行きを中止した、とはいえ、9 時ころに外を見ると雨が上がっていたので家の周りを一周だけはした。1/31 の夜も歩いたが月は真ん丸の時間だった、月食は見なかった。話は飛んだけれど、IC レコーダーはこれで 3 台目。最初のもはもう 5,6 年は使ったかな、「今頃 IC レコーダー」とあきれられているが、アウトドアで持ち歩き、「ぶつぶつ 何をしている 何を考えている いろいろボヤキ」を録音し、帰ってパソコンに入れ、再生して文章を書いている。「なにい 開かない 聞けない」と驚いたのが 2 番目の機器。ファイル形式の事、「そらあ 画像のファイル形式ならよく知っているが・・・」音声にも動画にも画像と同じようにいくつかのファイル形式があるとは思っていたが、「オレのパソコンで は開かない」では困ってしまった。

今年の冬は寒い、大型寒波、何年に一度の寒気団、という言葉が気象庁から漏れ聞こえる。この数年か、この十年か、気象庁は過剰に言う、少々大げさに言っているのかね、台風の時も、大雨の時も、寒さ暑さも、大げさ表現が聞かれる。今年のおれはありがたいことに去年のヒザイタがない、去年は歩きも走りもできなかった、そろりそろりと身体をかばって動いていた。とはいえ調べると、去年 1 月 25 日は愛宕山に登っている、2 月 27 日には雪かきに行っている。今年ヒザイタがない、山に登れば身体が熱い、河原を走れば自然とポカポカする、「身体を動かせば 発熱するのだ」と馬鹿を言って喜んでいる。アトリエ室内温度は 5 度から 10 度ぐらい、無駄な暖房は使わない、電気の床カーペットでほとんどの時間を過ごしている。

展覧会がもうすぐだ、一カ月前になったら、出品作品の選択、手直し、額装を考えている、2 月 15 日、雪かきから帰ったら始めようと思っている、今はじっと満を持している、なんて格好をつけているわけじゃないが、普段通りに絵を描いている。去年は 3 回も展覧会があつて、「岡村 またかあ」と嫌な顔をされそうだけれど、おかまいなく展覧会案内状の DM の宛名書きは初めている。年賀状を出さない分、お礼も込めての宛名書きだ。

今年も 2 月 12 日から雪かきを予定している。雪かき現場の写真を送ってもらったが、驚くほどに雪が多い、あと 10 日ほど経った時点で同じような積もり方なら、過去一番の積雪かなと期待している。現地の人の話では積雪量が年々少なくなっているらしい。子ども時代はこんなものではなかった、と老人の与太話でもないが、おれが雪かきに行き出してもう 6,7 年になるのかなあ、毎年のように積雪量が減っている。昨年や一昨年は、現場に近づく国道に雪がなく、「雪かき しなくても・・・」なんて少しがっかりしたが、それでも一日汗をかいて雪を運ぶ作業は残っていた。最初の年は、雪かきが終わって帰る時点で、まだ 1 メートルぐらいの雪が残っているという状態だったが、去年は帰る時点で、土が見えていた。

昨日は久しぶりにこの河原を欠席した。なんだか一日中小雨が降っていた、欠席は今年初めてじゃないかなあ。毎日見慣れている景色、中洲にによきによき枯れすすき、晩秋の枯れすすきはまだまだ形をそのままに残していた、枯草色にはなっていたが、軸が、葉が、穂がたなびいていた。二三か月経ったこの季節になると、曲がりくねり、折れ、倒れ、枯草色がアート状態の空間を区切っていると言えば恰好がいいが、今や崩落寸前のあばら家状態である。あと何日かすれば、春を感じた青い芽が、最初は小さく、すぐによきによき。大きくなるのはドヤツかな、からし菜の花はいつかな、スマレやタンポポは、なんて少女の気持ちになっている。いつもストレッチをする折り返し点は、川幅がどれくらいだろう、30 メートル、いや 50 メートル、どうも目視というのは曖昧なものだ。カラスとハトはいつもいる。先ほどここまで来る途中に、抹茶色の羽の小鳥の集団、あれは何かねえ。ここはカモがいつもいる、名前は知らないが、アイガモなのかマガモなのか、先日じっと見ていると少し小ぶりのヤツの褐色の羽の中に鮮やかな緑色を発見した、身体の中に隠していた。「ほ きれいな緑」

富士正晴著<パロディの精神>この先生は茨木に住んでいた、いつも通う中央図書館に「富士正晴文学館」が併設されている、2,3度入ったか、失礼ながらまだ著書は読んでいない、ふと面白そうなのでこれをを借りてきた。富士正晴のことで思いだすのは、東宝画廊の近藤さん。オレが二十歳代に、水野さんが（ギャラリーみずの）、「ちょっと変わったギャラリー」と紹介してくれた。梅田コマ劇場の裏の細い階段を登っていくと東宝画廊があった。その画廊で二回展覧会をした。近藤さんはオレより20歳ぐらい年上の方、有名画廊から独立して、梅田のど真ん中なれど、寂しい階段を上った空間に一人ポツンと籠っておられた。毒舌家でいつもぼやいておられた。その近藤さんのドル箱が、コマ劇場の舞台裏で知り合った劇団民芸の人気俳優、米倉齊加年の展覧会、それと当時有名な俳人だったが名前を失念、それとこの富士正晴さんだった。「茨木からバスに乗って 安威の方 棲みかのようなところで しゃべるしゃべる」と言っておられた、茨木ついでに我が家にも寄っていただいた。富士正晴さんは南画風の絵だったと覚えている。懐かしい近藤さんとは永らく没交渉、二十歳ぐらい年長で身体が頑健でない方、亡くなっておられるやも。

最初の話：耳底記：「この書記は細川幽齋法印玄旨へ烏丸大納言光広卿数年相尋ねられし処の問答ならびに当座の物語ゆえに・・・」二人ともに京都で生まれ育った武将と公卿。20歳の光広が65歳の細川幽齋の隠居に、歌について教を乞うために訪ねて行った。「吉田に閑居を嬉しく思い侍りてまかれば、いかにも ぼぢやぼぢやと あひしらはれしなり。さすがにまた慇懃也。妙也。道者とみえたり。」先生ここで、「ぼぢやぼぢや」という方言、あしらわれることに悪い意味合いはなく、ふんわりと対応してくれた、ぐらいじゃないかな、とおっしゃる。千年も前にこんな言い回しがあったとは、面白いと思いながら、これから本筋の“伊勢物語”（平安中期）と500年ぐらい後のパロディ本“仁勢物語”を紹介します。ニセという表現、こんな昔こんなケタイな話があったとは、くすくすなり。

伊勢物語：平安初期の歌物語、作者不詳。ある男の元服より死までを数行ぐらいで125段、仮名文と歌で描かれる。「昔男」と呼ぶが、在原業平の歌を多く載せ、主人公に業平を思わせるが、皇族の貴公子である業平に遠慮したのか。男女の恋愛を中心に、親子、主従、友情、社交関係を描く。題名は業平と伊勢齋宮（帝の名代として伊勢神宮で神事の奉仕に行く 当地で男と会う事は大変な禁忌事項だった）との密通が当時、貴族社会に衝撃を与えたことからか。

◎一) 伊勢) 初冠 (ういかうぶり)：昔、男、初冠をして、奈良の都、春日の里に領地があるから、狩に行った。その里にいとなやめいた女はらから (姉妹) が住んでいた。その男、かいまみたのだ。おもおえず古い里に、いとはしたなくありければ (につかわしくない)、心地がまどってしまった。男の着ておった狩衣の裾を切って、歌を書いてやる。その男、忍褶り (しのぶずりー調べたが不明-どんな布なのか?) の狩衣を着ておったのだ。

☆春日野の 若紫の褶衣 忍ぶの乱れ 限り知られず

と、こう老付いて (大人ぶって) 行ってやった。ついでに面白いこととも思ったのだろう。

☆陸奥 (みちのく) の 忍ぶもぢ褶り 誰ゆえに 乱れ初めにし 我ならなくに

という歌の心ばえである。かくいちはやき風雅をやったのである。

◎一) 仁勢) 頼冠り：おかしな男、ほおかぶりして、奈良の都春日の里へ、酒飲みに行った。その里に、いと生臭い魚、はらか (タラ) というのがあった。この男、買うてみたのだ。おもおえず古巾着にいと (全く) はした銭もなかったから、心地がまどってしまった。男の着ておった借り着をぬいで、魚の値にやる。その男、渋染めの着物を着ていたのである。

☆春日野の 魚に脱ぎし 借着物 酒飲みたれば 寒さ知られず

とね。又ついでに飲んだ。酔っぱらって、面白いこととも思ったのだろう。

☆道すがら しどろもちすり 足元は 乱れそめにし 我なら (奈良) ざけに

という歌の心ばえである。昔人は、かくいらちたる (心せく) 飲みようをしたものである。

先日、二十歳まえからの友人、秀明君が信貴山口の駅前に家を新築したのでいった折、「高安の女」の話が出た。もうひとつ、今は三十代のわが娘が、京都の学校で授業中、「高安なんて所に 縁のある人はいないだろうけど」と先生が伊勢物語の授業で、「ばあちゃん 住んでる とは言えないもんね」と首をくすめていた。

◎二十三) 伊勢) 筒井筒：昔、田舎わたらひしていた人の子供が、井戸のそばに出て遊んでいたが、大人になったから、男も女も恥ずかしがり合っていたが、男はこの女をこそ得ようと思う。女はこの男をと思いつつ、親が縁談を持ってきて、聞かないでいた。さて、この隣のもとよりこのようにそれ。

☆筒井つの 井筒にかけし まろがたけ 過ぎにしけらしな 妹見ざるまに  
女返し

☆くらべこし 振り分け髪も 肩過ぎぬ 君ならずして 誰かあぐべき  
などいいいいして、遂に本意のごとく一緒になった。さて、年がたつうちに、女の親もなくなり頼りなくなって、お互い貧しいままで甲斐もなくあるようではと、河内の国、高安の郡に、行き通う所ができた。そうだけれど、この元の女はけしからぬと思う風もなく出してやるので、男は、よそ心があつてこうなのだろうと思ひ疑つて、前裁の中にかくれていて、河内へ往くような顔で見ると、この女はたいへんきれいに化粧して、眺めやり。

☆風吹けば 沖つ白波 たつた山 夜半にや君が 独り越ゆらん  
とよんだのを聞いて、限りなく悲しいと思ひ、河内へ往かぬようになった。まれまれにかの高安へ来て見ると、はじめこそ心憎いほどきれいに化粧もしていたが、今はうち解けて、自分の手で杓子をとり、筍子（けこー昔の飯椀）の器ものに盛ったのを見て、うんざりして、往かなくなった。そうだから彼女は大和の方を見やつて、

☆君があたり 見つつを居らん 生駒山 雲な隠しそ 雨は降るとも  
といて外を見ていると、やっと、大和人が来るだろうといった。よろこんで待つが、度々来ずに過ぎてしまったから、  
☆君こむと いひし夜ごとに 過ぎぬれば 頼まぬもの 恋ひつつぞふる（月日を過ごす）  
といったけれど、男は寝泊まりしなくなった。

◎二十三) 仁勢) つといつか：おかしい中（田舎）くだりした人の子供もが猪をゆでて食べていたのだが、大人になってから、男も女も、鉢たたき（空也念仏 鉦を鳴らしおどく角付け）の子であつたけれど、男はこのわざをいやと思ひ、女もこれをいやと思ひつ、親が教えるけれどならわなないでいた。さてこの隣の男のもとよりこのようになった。

☆つといつか いのししくひし まろひたい（丸い台か？） わりにけらしな 飯汁の椀  
女返し

☆くらひにし ふるかけこきも（欠けた器） かいわりぬ（欠き割った） 君ならずして たれかくるべき  
などといいいいして、とうとう望み通りに呼んだ。さて年がたつていくうちに、女の親がなくなり頼りなくなったので、お互い、飯米（いいまい）がなく居れるもんかと交趾国（インドシナ）、たかさ国（台湾）へ渡つて、行き通う。けれどこの地で、銭など多くなり、限りもなく楽しかったから、男に別の女がおつて、思いくたびれて、千年もという仲も絶えそうになり、深うちなみぬる（深く親しそうな）顔をしてみると、この女いとしごと（裁縫）をしながらそこらを眺めて、

☆風吹かば しらなみじょう まふの用心きびし ひとりなれども  
とよんだのを聞いて、限りなくかわゆく思つて、手かけの所へも行かぬようになった。まれまれにかの手かけへ行つて、みるとはじめこそ心憎いほどとりつくろっていたが、今はうちとけて、自分の手で飯釜を焚き、珍しい香のものを切っているのを見て、心うるさくなくなつて行かなくなった。彼女は男の方を見やつて、  
☆君があたに（仇） みすみすならん いかつちの 雲間におちて 頭とるべく  
といておどすのに、こわがつて男は来ようといった。 <あとは 略>

◎初めて登る山、前から知っていたが登る機会がなかった。前の日に調べると、「簡単に登れるよ 危険なところはないよ」という書き込みばかりだった。それこそ、いわくありげな山の名前だ、おどろしい名前だが、上から下の谷を見るとかわいい蛇にみえるとか、という程度の言い伝えが書かれている。

◎「7時半に 家に迎えに行く」という連絡で待っていると、衣川さん・裕子さんの乗った車がやってきた。「運転頼む 朝飯を食いたい」茨木 ICから京都東 IC、湖西道路を堅田で降り、途中、朽木へと走る。出る時にはお陽さんが顔を出している、どこらあたりまで晴れているか、どこらあたりから雪が見えるか、湖西道路を少し進むと比良の上は真っ白に輝いている。冬の季節、日本海気候の琵琶湖の東西、天気予報は曇りか雪が多い、雪崩に、風雨に注意とこれも多い。途中の交差点から 367 号線に入ると、急に家々の屋根に雪、庭にも畑にも雪が積もっている。このあたりは雪の多いところだ、いっぺんに雪国になった。川端康成は「トンネルを抜けると雪国があらわれた」という、先日の高槻も、小さい峠を超えると雪国があらわれた、今日は途中の交差点を曲がると雪国があらわれた。先日来行っている吉野方面は宇陀市を越えたあたりから、なんだかひんやりしてきて、前から雪を積んだ車がやってきてすれ違った。茨木を出て 2 時間で目的地の朽木スキー場に着いた。

◎冬は最初から雨具のズボンを着ている、登山靴に履き替えスパッツをつける。上はダウンを着こみその上からヤッケを着てきたが、なんだか暖かいのでダウンはザックにしまった。衣川・裕子のお二人は何度か蛇谷ヶ峰に登っているそうだ、「こっちだよ」と導かれ、スキー場のネットを超えると人の踏みあと、たどっていくと、上に登山口の看板があった。道中の温度計は-9 度ぐらいを指していた、「平地でこんなに冷え込むとは 山の上はもっと寒いかな」という心配をよそに、なんだか温かい、陽が出ている、雪が光る、10 分も歩くとほんわかしてくる、ネックウォーマーは暑くてしてはならないはずしてポケットに入れた。先日も言ったが、ネックウォーマーは去年からもって持っていたが、しなかった、ひきだしに直したままだった、「お あるじゃない」と冗談で首にはめると暖かい、これひとつでジャケット一枚の値打ちがある、若いみなさんがこれをつけて動き回っているのがわかるねえ。

◎晴れてきた、雪の白さが目に染みる、「サングラスを持ってこなかった」まだ登りだして一本目、植林樹林帯の中はさほど陽が射さない、「ま この程度の日差しなら 鳥目は大丈夫」雪は 50 センチぐらいかな、靴が潜ってもしれている、ズボ足で歩いていたが、裕子さん、カンジキを付けるという。山慣れしていない方だけれど力強く登っている。

◎一本過ぎたあたりから下に琵琶湖が見える、「湖北だね」でっかく白くぼりんと伊吹が向こうに見える、「伊吹はフジのようだね カッコいいね」と掛け声が聞かれる、「あれを削ったやつは誰だ」と悪態をつきたくなる。

◎普段 2 時間ぐらいで登れる山、子ども連れのハイキングの山だそうだ。雪の今の季節、二三日前の土・日曜日に登った人の足跡がかすかに残っている、ショートカットの尻セードがいくつもあるが、登りはジグザグゆっくり歩いて登る。「あれがてっぺん」「そう」「ここまで 疲れた」という声を聞き、わがままを言ってひとりだけ、「ちょっと てっぺん 行かせて」と登りだした。

◎お陽さんのある雪の山、温かい、嬉しいねえ、「よいしょ こらしよ もうちよい こらしよ」蛇谷ヶ峰 902M と書かれた標識が雪の上に顔を出している。今日の雪は歩きやすい、潜らない、滑らない、ズボ足でもステップを切れれば登れる、雪に靴を蹴こんで、「えいやあ」「いやあ 真っ白 てっぺんだ」まわりがぐるりと見わたせる。「陽の光がきれいねえ 真っ白い雪がきれいねえ 青空がきれいねえ」満足である。

◎下調べをしないままにホイホイやってきたが、この山は比良山系の北の端、いつも行く朽木の町も近いし琵琶湖も近い、琵琶湖に突き出た三角の形、安曇川の三角州、ひょっとして高島市かな、車で走るとずっと続く街並なのに、てっぺんから見ると、あんなに小さい三角州、粒のような家々がたくさんある、間違いのない、あれは高島市だ、安曇川の下流だ。「駒田織布の駒田さん 見えますよ〜」である。

◎雪が歩きやすい、づぼづぼ靴が入る、下るには最適だ。踏み跡のあるところより新雪の中に足を入れ、づぼりづぼり快調に歩ける。「ちょっと失礼」ショートカットに尻セード、ガハハの雪遊びである。

◎さあそこから駐車場の舗装という時に、「いてて」両足の太ももの内側がつった、これは痛い、「よくまあ 最後の最後でよかった」写真は吹雪ではなくピンボケだ。自撮りなので、ピントがあわない。

この何日間、上西・衣川・オレの三人で、鳥談議でネットを賑わしている。最初に衣川さんが、「庭の畑でウグイスを見た」という話からはじまりました。すぐさま上西さんから、「ウグイス色をした小鳥は メジロだと思います」「ウグイスは地味な褐色で めったに姿を現しません メジロは目の周りに 白い輪があります」「ウグイスは ホーホケキョと鳴きますが 人が近づくと 警戒の声 ケキョ・ケキョ に変わります」若いころに淀川で生物観察をしていた上西さんの詳しい鳥の話が続く。

オレが毎日走っている安威川、折り返し点のベンチでいつもストレッチをする。20 分ぐらい、流れに向かって、飛んだり、跳ねたり、しゃがんだり、そのあいだ目は川面を見ている。「ピーピー」カモが泣いている、カモとはあんな声かな不思議に思ったが、彼らは子どもなのか、まだまだピーピー遊びまわっているのかな。そんな中、ヒューと飛び立った二匹の羽の下に緑色が見えた、鮮やかな緑色、これには驚き感激した。カワセミの青色もきれいだが、この緑色も負けず劣らずたいしたものだ、一瞬目に焼き付いた。

上西さんの話では、カモには淡水カモ、海カモがいるという。オレの見た緑色は、次列風切羽というのだそうだ。ただ図鑑を見るといやになるほどたくさんのカモが載っている、なにがなにやら、状態である。日本にずっととどまる留鳥から、シベリアからわざわざやって来る方々まで雑多である。シベリアということでは先日来読んでいる本に、「日本人のルーツは シベリアか」と書いてある。氷河期にシベリアから、氷結で大陸続きになった日本列島にマンモスとともにやってきたという。確かにシベリアの奥地の村の人たちの顔写真は、我々のまわりのおっさん姉ちゃんとそっくりの人たちが写っている、これには近親感がわきますねえ。

上西さんの話は続く。3 週間ほど前、家の前の通りを歩いていると前方から一羽の鳥が飛んできました。鳩のように見えるのですが飛び方が全くちがいます。羽を 2 回ずつ、羽ばたきが速く、真っ直ぐ直線に向かってきました。「タカだ！」と思いました。ハトより小さい、「ツミ」という名の鷹だそうで、小鳥を餌にしているそうです。

こんどは衣川さんから、やはり庭の畑で、こちょこちょと音が聞こえる、「なにか と見ると 小鳥が枝を突つき動き回っている 図鑑を調べると コゲラでした」

そんなこんなで鳥の話はどんどん続く。鳥の話が出てくると、日々の安威川通いの中でおのずと鳥に目がいく。いつも言うように、「オレは 木や花や 鳥や虫の 名前を知らない」というところにぶち当たってしまう。山に登って夜、山の中でテント泊をしたことが何度もある。「岡村さん 星がきれいだよ」と何度も仲間から起こされた。「むむ・・・」といて寝てしまった、チラリと見たこともあるが、寝てしまった、それこそ星屑が輝いていた。澤山さんが、「あの山の名は 隣のポコリンが・・・」「お花畑がきれいな この赤いのが・・・」久子さんが、「この木の名は 春と秋に・・・」とみなさん説明してくれる。その時はいいものだと思うがすぐに忘れてしまう。

オレ自身のいいわけではないけれど、自然の中に身を置いて、時間や空間の動きや流れ、形態や色彩、そんな一瞬の目の前の光景には興味がある、見たい聞きたい、感じたい触りたい、と思う。それらの、固有の話、説明になると目を背けるのか、目を背けるまではいかないが、それ以上は追及しないのかねえ。カメラマンが、「この瞬間」「この光」「この形」といって、何時間も粘っている姿には恐れ入るが、オレはあれじゃないねえ、できないねえ。

さあ走ろうと帰りかけ川を見ると、カモの団体が“いぬかき”ならぬ“かもかき”で進んでいる、キャツらがシベリアまで飛んでいくという翼力を考えると、たよりない泳ぎ方だけれど、仲間が一団となって前に進む姿は、カモの連帯感を感じる。数えると 30 羽いた、ファミリーかな。草むらでも何かをついばんでおちら歩いているが、オレが近づくと、ばたばた、オレを飛び越えて川に逃げてしまう、そんな連中も 30 羽ぐらいの団体かな。「あ 鯉がいるじゃない」なにげなく目を移すと、カモの手前、黒い川の中に黒い鯉、「おお 12 匹もでっかいやつが」「いや後ろにもう 2 匹」「え まだまだいる また 10 匹ぐらい・・・」なんと、百メートルほどの間に百匹ぐらいの大きな鯉が、川上に向かってじっとしている。自然の世界は目を凝らせばいろいろあるもんだねえ、と驚き。

◎大雪のさなか雪かきに行った 金沢インターチェンジより東に 5 キロの所 90 歳の地元の爺様が「こんな大雪は初めて 捨ててもすてても 降ってくる」 どの家も 布団をかぶったように 雪がかぶっている 降りたての雪はやわらかく グイとすくって グイと捨てられる

◎一日目：昨夜は、「北風ぴーぷー 吹いていた」だったが今朝は快晴、「北陸地方は暴風雪」というニュースながら、「ええい 行けえ」と 9 時茨木を出発した。滋賀・福井の国境峠あたりから雪国を感じさせるどんよりとしたモノクロの世界に入った、中央分離帯の車線だけが鮮やか黄色、雪をかぶったトラックが前からやって来る、「おお 雪が降っているのかねえエ」とトラックを見やりながら、行きちがえる。

◎福井県に入ると、「雪国に来た」と思われる、大阪近辺の雪山とは違って、樹々に雪がへばりつき、田んぼも、人家も真っ白である。何日か前に 8 号線で、「300 台の車が 雪に閉じ込められ 三日間の 立往生」というニュースがあった、「今日もこの雪では 8 号線は 無理だねえ 高速に乗ろう」と走った。今庄あたりから、高速ながら雪が積もって、舗装面が見えなくなってきた、暴風雪に近い状態、よこなぐりの雪がどんどん降ってくる、一車線だけ走れる、路肩も追い越し車線も雪だらけ、50 キロ制限でゆっくり走る、除雪車とも行き違った。

◎金沢 IC で下に降りた、「明日は 風呂と買い物に行くとして 今日の方は 金沢市内で 食料を 買っておこう」まさにこれが正解だった。例年なら金沢市内はさほど雪はないが、今は道路の端に 1 メートルぐらいの除雪の雪が積まれている、「ここで これなら この先 どれぐらいの 雪なのかなあ」期待と不安で先を急いだ。またまたよこなぐりの雪、タイヤが滑る、車の腹が雪でこすれる、前が見へにくいぐらいに降ってきた。

◎目的の家は国道から 100M ぐらい下ったところだけれど、坂道は除雪していない、降りられない。国道に車を止め調べるために歩いてみた。「おお これがすごい 今までで一番だ 家が埋まっている 除雪しないと ドアまで 行けない」坂道から入口までこんもり雪がある。高速の途中で長靴に履き替えていた、積んであるスコップを持ち出し、まずはそのこんもりにステップを切って階段を作りだした。山小屋の避難小屋で中に入るのに、スコップで扉の前の雪を除く要領である。「水道栓が こころあたり」そんなこんなの作業が終わり、ドアが開き、荷を中に入れた。車を、「少し離れた 村の方の 空き地に 置かせてもらう」と走って行った。

◎高速道路で、ちょっと降りた時に、散水のシャワーでまず運動靴が濡れた。長靴に履き替えドアを開ける作業中にズボリと雪の深みに足の付け根まで突っ込み、ようやく足が出てきた時点で、またまた長靴の中に雪が入って濡れた。こういうこともあろうかと、使い終わったプラブーツを持参していた。このプラブーツという代物、完全防水、インナーがあるので暖かい、となかなか優れものだったが、十年ぐらい履いていると、登山中に潰れた、割れた、破壊したと、恐ろしいことが起きる。なので、十年過ぎたあたりからお蔵入りしていたのだが、雪かきにはもってこいではないのかなと持参した。「長靴は 新聞紙を くしゃくしゃにして こまめに替えると 乾くよ」なるほど雪国の人は良く知っている。プラブーツは三日間これを履き続けたが、正解だった、完全防水で暖かい。ただ、雨具のズボン、プラブーツ、スパッツと着けるのも外すのもじゃまくさく、度々はできない、室内に上がり込めない。

◎「暗くなるまで作業しよう」とスコップとダンプで雪を捨て始めた。オレは体重が重いのもっぱら地上の作業、軒下に落ちた雪を、そばの川に捨てる。川は四五 M 下にあるのでオレ自身が落ちないように慎重に雪を落とす。いつもの年は、雪がもっと少ないが、降ってから一二月経っているのも非常に硬い、鉄のスコップを足で押しても跳ね返ってしまう。ちょっとづつ、少しづつ硬い雪を割っていく。それに比べて今年は雪が多いが、その多い分、降ったばかりの雪は軟らかい、スコップですすい、ダンプでほいほい、この作業は簡単に運ぶ。

◎暗くなってきた、着いたのが 3 時過ぎ、作業を始めたのが 4 時ころ、暗くなってきたので終了した。持参のビールと酒を飲んだ、いくつかのおかず、さあ寝ましょうと眠りについた。朝は 7 時ころ目覚め、朝食。オレは夜はあまり食べないが朝と昼はおおいに食べる、「岡村さん 燃費が 悪いね 休憩の度に なにか食べてるね」とよく言われるが、腹が減る。今回も小さいパンをいくつか持ってきている、めしとめしの間に食べるつもりである。

◎二日目：朝いちばん靴を履く前に考えた。大屋根の部厚い雪が危ない、あれが落ちたら大怪我をする、2 階に上がって、窓から棒で大屋根のつららを突いたが、少し落ちただけで、びくともしない。

◎大屋根からの部厚い雪は鎮座したまま、雪が落ちない、落ちない分、雪が凍って硬くなっている、そんな硬い氷が突然落ちたら、圧死だね、怖くて下では作業ができない。その部分はずいぶん帰るまで落ちなかった。その他の部分、身体の軽い家主さんが、梯子をかけて上に登り、スイスイとスコップで雪をおろした。「どうぞ 滑り落ちないように」軒下の高く積もった雪と瓦の軒先とひっついていて、その硬い雪が家の方に崩れると窓ガラスが割れる。「どうぞ 凍った雪さん むげに 落ちないで オレのいるところに 落ちないで 窓ガラスに 落ちないで」

◎朝から空はどんより曇り、雪が降る、霰が降る、ちょっと小康状態も続く、一日中雪が降り続いた。どんどん新雪が積もる、どさりと屋根から雪が落ちる、すぐにまた黒い瓦が白くなる。シーシュポスの神話なんていうが、この作業が、苦悩で苦痛、責め苦と考えるのか、たった三日間の肉体労働、「えんやこら よいとまけの歌」と身体の中で歌うのか、考え方違いではあるが、オレはどうもこの労働が好きなのである、三日間だけということもあるが・・・

◎二日目はずっと雪が降っていた、「これでは 車も出せない 買い物も行けない 風呂も行けない ありあわせですませてしまおう」ということで、またまたビールと酒、残り物を食った。ストーブを焚いているので室内は暖かい、布団の上の寝袋で寝るとなかなか暖かい、二日間ともぐっすり眠れた。

◎三日目：朝から快晴だ、やっと大雪が終わったのか。朝一番にワカンをつけてちょっと歩いてみた。除雪をしていない道は1M ぐらい積もっているだろうか、空は青々している、木の幹も枝も雪だらけ、向こうの景色も雪だらけ、国道の道路標識だけが白い雪の中に青く輝く。

◎朝から昼まで、えんやこら雪をすくって捨てた。「この大雪は おおいに疲れた さあ 終わらしましょう」と道具を置いたが、まだまだ家のまわりには2M ぐらいの雪が積もっている、残っている。

◎雪かきに使ったスコップにダンプを片付け、氷で割れた窓ガラスを波板でふさいだ。竹が雪で埋もれて倒れている、「一本ちょうだい」とノコギリで切った。竹の反発力はものすごい、ブーンと空に跳ね返った、太いものを持ち帰った。車は雪に埋まり除雪に掃除と時間がかかる、荷を積み込み雪かき現場を後にした。「カップヌードルだけでは 腹が減って・・・」と情けない話だが、店も何もない。帰る前にちょっとだけ山を散歩して帰ろうということになったが、「店はないよねえ・・・」「非常食が少々」「ええい いいかあ・・・」と車を走らせた。

◎帰ってから戸室山を検索すると、550M ぐらいの山で、まったり緑の簡単ハイキングコースだそうだ。戸室山は火山の山、てっぺんには溶岩ドームがあり、その石は金沢城石垣などに使われているそうだ。金沢大学の先生によると、日本には世界の一割ぐらいの火山があるそうだ。火山とは、2000 年以内に噴火した山だそうだが、先日噴火した御嶽山は、見れば明らかに火山だとわかるけれど、有史以来、噴火はなかったそうだ。

◎何度か来たことがある医王山スキー場の駐車場に車を止めた。時間は2 時ころ、今度はいつもの登山靴にスパッツ、ピッケルをもって登った。「登山口は・・・」なんと民家のそばが登り口、雪をかきわけ登りだした。ひざまで足が沈む、「ワカンがいるねえ」とすぐにワカン装着、それでも沈む、「えいこら こらしよ」どんどん登る、雪かきの疲れと、腹が減ったのとで、力が入らないとは言わせませんぞ、「えいこら こらしよ」どんどん登る。空は青く、雪は白く、樹々の雪はこの暖かさでぼそぼそ落ちる。向かいのスキー場の音楽が聞こえるが、客は少なさそう。

◎1 時間半ぐらいでてっぺんに着いた。かろうじて、「戸室山：548M」の標識が見える、この付近の積雪は2M 足らずかねえ、青空が少し霞んできた、さきほどまでの暖かさから冷たい強風が吹きだし、雪国の寒さが戻ってきた。てっぺんの平らかな大地を少し歩くと、山の祠ぐらいではなくお立派な堂がある、修行の山なのかねえ。

◎でっかいブナの木が枝をあちこちに伸ばしている、これは風がきつい場所なのかな。登るときはポカポカ陽気と、エッチら登る発熱で、身体中が暖かく手袋もいらなかったが、4 時前の夕方になり、てっぺんは冷たい強風、オーバー手袋にヤッケを着こみ、非常食のビスケットを齧り、降り始めた。雪の下りは早い、スイスイ 1 時間もかからずに車にたどり着いた。汗で濡れたシャツを三日ぶりに着替え、「さあ 大阪へ その前にどこかで めし」と出発した。

◎5 時に出発、食事は尼御前 SA で、己が垂涎の的、かつ丼を食った。往路と違い、復路は高速道路上の雪もなく、難なく走れた。精一杯に身体を動かさせた三日間、大満足であった。最後の 3 時間足らずの山もこれまたおまけの満足、大阪にたどり着いたのは11 時ぐらいだったかな。

コンピューター関係の学者の友人が、「8号線の大渋滞 もう少し早く もう少し手際よく 処理できなかったのか」と言っている。

2月6日のことを調べてみた。以前“カマキリの卵”というエッセイを読んだ時に、“三八豪雪”“五六豪雪”という言葉聞いた。昭和38年：1963年と昭和56年：1981年のことだそうだ。「カマキリの卵が 枝の 上の方に いつもより高いところに 産みつけられていれば 今年は 大雪になる」という言い伝えを聞いて、街の学者が調べた。その方はアンテナ会社の方、たくさんのアンテナが倒れ、その修繕で大変だった。まわりの雪国を調べまわったらしい。その結果、毎年カマキリの卵は雪の上に顔を出していた、低い時は雪が少なく、高い時は雪が多い、古老のいう通りだったという話だ。カマキリは草木の枝に卵を産む、卵が冬を過ごす間に冷たい雪に触れさせたくないという理由だ。カマキリは何らかのセンサーで、雪の積もり具合を予想、判断し、枝の上か下に卵を産み着けるとのことだ。

話は飛んだが、今年の福井、雪は37年ぶりの大雪だそうだ。八年目になる“オレの雪かき”現場も相当なものだったがその話のはちほど。今回の国道8号線大渋滞の、時間的な経過を簡単に拾ってみた。雪が降り始めた当日、福井県では、新幹線や特急、航空機の遅れや運休が心配されたが、道路の渋滞の報告は少なかった。道路に関して、まず、北陸自動車道の鯖江ICと砺波IC間が通行止めになったのり、車はそばの8号線に迂回してきた。降り続く雪の中、8号線では一時、1000~1500台の車が立ち往生の大渋滞が発生し、自衛隊に災害派遣要請が出された。ニュースで聞いた話では、300台の車が3日間動けなかった。地域の人たちの協力やおもてなしで、運転手の皆さんは穏やかに開通を待っている、という美談が聞こえた。地域の人が、トイレを貸し、食事を提供し、仮眠所を作ったとか・・・。

電車の到着が20秒遅れただけで、「もうしわけない 迷惑をかけた」と謝る現場職員の声に象徴されるように、あらゆる事が予定通り、規則通り、時間通り、動くことがあたりまえと考えている国民性だ。「こんなことになる前に、何か手が打てなかったのか」ニュースが流れるたびに、街の評論家の声が、専門家の説明が聞かれる。

街の声が聞こえる。

◎自動車の数が三八豪雪時、3.5万台が50年足らずで65万台にまで増えた。昔は雪で車が出せないとわかっていれば、朝は早く起きて徒歩で通勤したものだ。ちょっとした荷を運ぶにも雪の上をそりで運んだものだ。

◎トラック関係者は、荷主の要請があれば、豪雪や暴風雨なんて言うてはおれない。トラックが雪道で動けなくなれば渋滞を起こし迷惑をかける、除雪作業を妨げ、緊急自動車の運行も妨げる。しかも雪道運転は危険を伴う。

◎除雪は、県や市、町や村の除雪計画が机上の空論化した感がある。目の前の国道の除雪をしたいが、管轄が違う、縄張りがあるので、泣く泣く引き返す。わが村わが地域を優先してしまう。

オレの雪かきの件は、先日も書いたが、今年の雪は例年になく多かった、現地に到着して、「家ふわふわ布団に すっぽり 覆われたような」という表現がぴったりするような感じだった。登山が好きなので、冬の雪山へも何度も行ったことがあるので、「家がふわふわ布団に すっぽり 覆われたような」という光景は高いところで何度も見ている、これは大雪の降る場所のことだと思っていたが、いつもの現場がこの状態を目のあたりにして、「雪かき 何処から始めたらいいのか・・・」と着いてすぐは少し慌てた。

道路や鉄道、いかに日常を持続させるか、いつも同じところに同じ時間に予定通り日常を保たせるか、上も下もその事業に作業に携わる人たちの勤勉さは感心する、次から次に新しい工夫、新しいアイデア、試行錯誤が見える。よく聞く話に、「外国の鉄道は いつ出発 何時間遅れ 何処へ行くの」と日本では考えられないような話が聞かれる。乗り物に乗って知らない旅先で、「明日、あそこに行きたい」という時は不安になるね、「早く着きたい 時間に間に合いたい 何時に 何処へ行けばいいの」と焦るときは嫌だろうね。

とこんなことを考えながら、「まあ おかむら君 なにも気にせず ゆっくり のんびり ですよ」と聞こえてくる。